

〈実践報告〉

# 新型コロナウイルス感染症流行下における基礎看護学実習の 実践報告

Impact of COVID-19 on Hospital Training for Nursing students:  
Perspective and a New Approach

伊藤 朗子<sup>1</sup>, 山本 純子<sup>2</sup>, 本田 由美<sup>3</sup>  
谷地 季子<sup>4</sup>, 浅井 美穂<sup>5</sup>, 登喜 和江<sup>6</sup>

## 要旨

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い実習施設の受入れ制限は長期化することが想定される。本学看護学部2年生が履修する基礎看護学実習も、病院実習と学内実習を組み合わせ実施したことから、プログラム内容と学生の学びの様相を検証し示唆を得ることを目的とした。電子カルテからの情報収集と遠隔による患者とのコミュニケーションを実施し、実習指導者からの指導を受け、患者の問題解決過程を展開した。学内では臨床心理士による対人関係ワークショップや患者の看護計画の一部をシミュレーションし、計画した看護技術のエビデンスを検証した。自己の成長・達成できたことに関する学生の記録を質的記述的に整理した結果、9つの内容に集約され、「問題解決思考のステップアップを実感」、「患者との遠隔コミュニケーションからの気づき」、「自己の学習方法や姿勢の変化」、「チーム活動の中で得た学び」などが得られた。検討の結果、少ない時間、部分的な参与であっても臨床現場の内容を取り入れることや、患者を中心に臨地と学内実習のプログラムを関連づける必要性が示唆された。

キーワード：新型コロナウイルス感染症, 看護学生, 授業評価, 基礎看護学実習  
COVID-19, Nursing Student, Evaluation of teaching methods,  
Clinical Practice of Fundamental Nursing

## I. 諸言

2019年12月に発生した新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、実習施設において医療体制の維持や感染予防の観点から学生の受入れ制限が行われた。2020年10月に文部科学省が実施した実態調査で、大学の看護師等養成課程の臨地実習において、全てまたは一部に代替措置を実施した大学は289課程のうち97.2%だった(文部科学省, 2021)。2021年8月の段階で、国内の新規陽性者数は1週間平均21,986人と収束の目途はたっておらず(厚生労働省, 2021)、今後も臨地実習時間の短縮や実習中止等の対応が長期化することが想定される。看

護基礎教育において臨地実習は知識や技術を実践の場面で適用し、看護の理論と実践を結びつけて理解する能力を養う場として重要である。そのため、感染流行による影響を考慮しながらも、大学教員は利用できる資源を最大限に活用して、学生の学習機会を担保する必要がある。教育の代替手段として、シミュレーション演習や学生同士の実技演習などがあり、感染の流行状況に合わせて臨地実習と組み合わせ、対面や遠隔形式など様々な方法で実習プログラムを柔軟に調整していく必要がある。2020年度、本学看護学部の2年生が履修する基礎看護学実習Ⅱも、病院実習と学内実習を組み合わせ新たなプログラムで実施した。看

1 Akiko ITO	千里金蘭大学	看護学部	看護学科	受理日：2021年9月2日
2 Junko YAMAMOTO	千里金蘭大学	看護学部	看護学科	
3 Yumi HONDA	千里金蘭大学	看護学部	看護学科	
4 Toshiko TANIJI	千里金蘭大学	看護学部	看護学科	
5 Miho ASAI	千里金蘭大学	看護学部	看護学科	
6 Kazue TOKI	千里金蘭大学	看護学部	看護学科	

護基礎教育において、各大学が手探りで代替方法を模索するなか、新たに新型コロナウイルス感染症の流行に伴い実践した基礎看護学実習について、概要と学びの様相を整理し、得られた示唆を報告する。

## II. 基礎看護学実習 II の概要

基礎看護学実習 II は看護学部 2 年生が後期に履修する必修科目である。通常、2 週間の病院実習において、1 名の患者を学生が受け持ち、患者との関係性の構築、問題解決思考を基盤として患者の看護を展開、実践する実習である。2 施設へ実習を依頼し、1 病棟に学生 5 名程度を配置、大学教員と実習指導者である臨床看護師の指導を受ける体制で行われていた。

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、受け

入れ可能な病院が 1 施設となり、学生と患者の直接の対面は中止、病院電子カルテによる情報収集と実習指導者による指導は可能な状態で実習プログラムを修正することとなった。臨床側と調整し、最終的に臨地実習 4 日、学内実習 6 日のプログラムを作成、実施した。

### 1. 実習期間と学生配置

2021年 1 月 25 日から 2 月 18 日に 3 クールに分かれて実施した。該当学生 100 名が履修し、1 病棟に 8~10 名の学生を配置、学生は 4~5 名が同じ 1 名の患者を受け持つ形態だった。

### 2. 実習目的と目標

臨地実習において、患者との対面が困難となった点を中心に、実習目的と目標を修正し設定した(表 1)。実習プログラムの詳細と実習目標の関係

表 1. 2020 年度基礎看護学実習 II の目的と目標

実習目的
看護職者として求められる責任、特性や役割について自己の課題を設定し、主体的に取り組むとともに、問題解決思考を基盤とした看護を系統的に展開することで、看護の対象および看護への理解を深める。
実習目標
1. 看護職者として求められる責任、特性や役割について、実習全体を通して自己を振り返り、課題発見・目標設定・課題解決について主体的に取り組む。 <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 看護職者として求められる特性や役割である、思考、倫理、コミュニケーション、協働、安全、エビデンスといった点について、自己の課題を明確にすることができる。</li> <li>2) 日々の実習の中で、自分自身を振り返ることができる。</li> <li>3) 自己の目標を管理し、課題達成を目指して主体的に取り組むことができる。</li> <li>4) 看護職者に求められる対人関係能力について、自己を振り返り、課題を見出すことができる。</li> <li>5) 目標達成行動と集団維持行動を意識し、効果的に他者と協働することができる。</li> <li>6) 健康管理に留意し、体調を整えて実習に臨むことができる。</li> <li>7) 主体的に事前学習をして実習に臨むことができる。</li> <li>8) 必要時に実習指導者、教員等に報告・連絡・相談ができる。</li> <li>9) 患者、実習指導者、教員等との約束を守り、誠実に対応することができる。</li> </ol> 2. 電子カルテ情報から、患者の特性を踏まえて看護過程を展開し内容を検証する。 <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 患者の持つ考え方、価値観、生活様式などの個別的背景に積極的な関心を持つことができる。</li> <li>2) 看護の視点から情報を収集・整理し、患者の全体像が記述できる。</li> <li>3) 患者を統合的にアセスメントし、看護上の問題を導き出すことができる。</li> <li>4) 看護上の問題解決に向けて、患者を中心とした看護目標が設定できる。</li> <li>5) 看護目標を達成するために、具体的な看護計画が立案できる。</li> <li>6) 患者の 1 日を想定して、日々の目標と行動計画を立案する必要性がわかる。</li> <li>7) 日々変化する患者の状況に合わせて、看護過程の各段階を修正することができる。</li> <li>8) 立案した看護計画を、シミュレーションによる実践を通して洗練できる。</li> <li>9) 立案した看護計画に含まれる看護技術について、ケアの多様性やエビデンスを検証できる。</li> </ol> 3. 患者の療養生活にかかわる様々な職種の機能や特性と連携の実際を理解する。 <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 患者の療養生活にかかわる様々な職種の機能や特性がわかる。</li> <li>2) 患者の療養生活に実際どのような職種が関わり、看護師と連携しているか整理できる。</li> </ol> 4. 実習全体の学びを統合し、自己理解および看護への理解を深める。 <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 実習の目的・目標に基づいて実習を通しての学びを統合し、表現できる。</li> <li>2) 今後の学習の方向性や課題、自己の看護に対する考えを表現できる。</li> </ol>

性は図1に示した。

### 3. 臨地実習プログラムの実際

電子カルテ情報を中心に6日間で患者の問題解決過程を展開した。臨地実習中、患者への看護展開に関する思考の整理や専門知識の確認のため、2日間学内実習を設けた。臨地で学生は、病棟以外の別室で電子カルテ操作、実習指導者より患者紹介や患者の看護に対するフィードバックを受けた。また1時間程度、病棟において看護師の申し送りや病棟の構造を見学した。

患者との対面は難しかったが、遠隔による患者とのコミュニケーションと病床環境の観察を可能な範囲で2回設定した。患者へはイメージ写真1, 2を用いて説明し、承諾の得られた範囲で実施した。詳細の実施内容を表2に示す。

### 4. 学内実習プログラムの実際

問題解決過程を用いた看護の展開に伴い設けた2日間の学内実習以外に、3つの学内実習プログラムを設定・実施した。



写真1. 遠隔コミュニケーションの説明に用いたイメージ写真：患者側の様子



写真2. 遠隔コミュニケーションの説明に用いたイメージ写真：学生側の様子

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目
	病院①	病院②	学内①	学内②	病院③	病院④	学内③	学内④	学内⑤	学内⑥
内容	9:00-16:00 看護過程の展開 実習指導者① 病棟オリエンテーション 患者紹介 情報収集 情報の分類と整理 関連図(病態)	8:30-15:30 看護過程の展開 P1:病棟見学① 朝の申し送り 参加(2-4名) P2:【遠隔】① 患者とのコミュニケーション・環境観察 情報の分類と整理 情報の解釈・分析 関連図(病態)	9:00-16:00 看護過程の展開 関連図(統合) 全体像 統合と問題の明確化 多職種連携場面の抽出と基本的な機能や特性の確認 学内プログラム① 対人関係ワークショップ	9:00-16:00 看護過程の展開 関連図(統合) 全体像 統合と問題の明確化 多職種連携に関する質問 P2:【遠隔】② 患者とのコミュニケーション・環境観察	8:30-15:30 看護過程の展開 情報収集-看護計画 P1:病棟見学② 朝の申し送り 参加(2-4名) 実習指導者② 全体像と関連図の発表・指導者よりフィードバック	8:30-15:30 看護過程の展開 情報収集-看護計画 P1:病棟見学③ 朝の申し送り 参加(2-4名) 実習指導者③ 看護計画の発表・指導者よりフィードバック	9:00-16:00 学内プログラム② 看護計画の実践と洗練 【シミュレーション演習】	9:00-16:00 学内プログラム③ 看護技術のエビデンス検証	9:00-16:00	9:00-16:00
目標1	実習全体の自己目標管理 学びの会(30分) 学生と教員の振り返り									
目標2	アセスメント 関連図(病態)		対人関係ワークショップ 全体像 統合と問題の明確化		看護計画 *各段階の追加修正		看護計画の洗練	看護ケアの多様性やエビデンスの検証 *各段階の追加修正		各段階の追加修正まとめ
目標3	行動計画①	行動計画② 受け持ち患者の電子カルテより多職種との関わりを抽出	グループワーク ・多職種の機能と特性を調べる ・疑問点を整理		行動計画③ ・実習指導者への疑問点の質問 ・多職種との連携を整理	行動計画④				
目標4										学びの統合 面談・レポート

図1. 基礎看護学実習IIのスケジュール詳細と実習目標との関係性

表2. 遠隔による患者とのコミュニケーションの実際

項目		
受け持ち患者人数		24名
実施時間	1回あたり	10-20分
実施状況	患者1名あたり	0-2回
	全体 実施回数	45回
	全体 中止した回数	3回
	中止の理由	体調不良
実施場所	病室 (個室)	26回
	病室 (4人床)	1回
	面談室・カンファレンス室・デイルーム・講義室	18回
プライバシー	画面・音声・周囲環境の撮影可	21名
	画面・音声のみ可/周囲環境の撮影不可	1名
	音声のみ可*	2名
実施内容	会話、環境観察、車椅子への移乗見学、創部の観察、下腿浮腫の観察、歩行状態の観察、下腿の弾性ストッキングの観察、ギプス固定観察、胃瘻の観察	

備考：\*1名は本人が不在時に許可を得て、指導者同席のもと環境の撮影を行った

### 1) プログラム① 対人関係ワークショップ

実習で患者との関わりができないなか、看護職者に求められる対人関係能力について、自己を振り返り、課題を見出すことを目的に、臨床心理士によるワークショップを半日実施した。

### 2) プログラム② シミュレーション演習

臨地実習で立案した看護計画を患者へ実際に実施できないため、学内でシミュレーション演習を実施した。学生は自分の計画を実施する場面を決定し、他学生を患者役として実施、看護計画が患者の個別の状況を反映しているか、患者へ実施できるぐらい具体的に検討できていたかを中心にデブリーフィングを行った。

### 3) プログラム③ 看護技術のエビデンス検証

臨地実習で立案した看護計画に含まれる看護技術について、臨床で実際に行われるケアの多様性やエビデンスを検証する目的のもと実施した。学生は検証したい看護技術をチームで1つ取り上げ、2日間で検証、半日で発表と共有、意見交換を行った。学生がとりあげたテーマについて表3にまとめた。

表3. 看護技術のエビデンス検証で学生がとりあげたテーマ

	内容
1	ベッドの挙上角度と褥瘡の関係
2	血液循環に効果がある看護ケアについて
3	靴と転倒の関連性
4	嚥下障害を持つ患者に適した食事姿勢と食品形態
5	仰臥位と座位による足浴実施後のバイタルサインの違い
6	長時間同一体位による身体への影響とマットレスの違いによる体圧への影響
7	人工股関節の脱臼しやすい姿勢の検証
8	足浴による血液循環促進効果
9	糖尿病の運動療法のエビデンス
10	コミュニケーション技法についての検証
11	マッサージ、温罨法、運動、姿勢と腸蠕動との関係
12	手指衛生の必要性
13	片足挙上での車椅子移乗
14	ホットパックによる皮膚表面の温度変化
15	車椅子で使用する除圧クッションの比較
16	ポジショニングによる体圧変化
17	清拭タオルの違いによる皮膚表面温度と主観への影響
18	タッチングによる心理的・身体的効果
19	足浴によるリラクゼーション効果
20	理論に基づいた患者教育の有効性について
21	温罨法におけるお湯と蒸しタオルの違い
22	インスリン自己注射の手技での手指衛生の必要性
23	患者教育についての検証
24	衛生的手洗いによる効果

## Ⅲ. 学生の学びの様相

### 1. 対象

2020年度の基礎看護学実習Ⅱを履修した看護学部2年生100名を対象とした。

### 2. データ収集方法と内容

実習の成績評価終了後に、学生へ研究の説明と依頼をし、同意が得られた学生の実習記録について該当部分を複写し返却した。分析対象として収集した内容は、「実習における自己の成長と達成できたこと」である。

### 3. 分析方法

学生の実習記録より、実習により得た学びに関する記述を取り出し、NVivo.11を用いて質的帰納的に整理した。

### 4. 倫理的配慮

対象者には、実習の成績評価終了後に研究の目的と方法、参加は自由意思であり成績とは無関係であること、プライバシーの保護や研究結果の公

表、本研究以外にデータは使用しないこと等を、科目責任者以外の研究者より文書を用いて口頭で説明し、同意書を用いて研究参加への同意を得た。実習記録は、個人が特定される部分は削除して複製し、原本は返却した。また、本研究は所属大学の疫学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号K20-016)。

## 5. 結果

同意が得られた実習記録は78部であり(回収率78%)、全て分析対象とした。学びとして整理した全てのリファレンスは149あったが、『患者の情報からアセスメントできた』など、具体的な内容が不明だった24リファレンスを除き、125リファレンスを対象とした。

自己の成長・達成できたことに関する学生の記述を整理した結果、9つの内容に集約された。最も多かった内容は、「問題解決思考のステップアップを実感」であり、その他、「患者との遠隔コミュニケーションからの気づき」、「学習方法や姿勢の変化」、「チーム活動の中で得た学びや工夫」など多岐にわたっていた。以下、各内容についてリファレンス(『』にて表示)とともに説明する。

「問題解決思考のステップアップを実感」では、『看護過程の記録において何をどのように記載すればよいか分かった』など、授業で曖昧だった内容の確認や重要性の再認識をしていた。病院の電子カルテから情報収集を行ったことにより、『莫大な情報から必要な情報を選択する力を身につけることができた』、『電子カルテから情報収集する方法が分かった』という内容もみられた。学生の中には、『現在、何に対してケアを行うことが大切なのか優先順位を意識できた』といった優先度の意

識や、『情報を整理することで患者の強みに気づき計画に活かすことができた』、『現在の状況だけでなく過去と未来と関連づけて考えることができた』、『患者は初日と最終日でADLに変化があり看護が生活の中にあることが理解できた』、『心理的側面や社会的側面も考えるなど考え方の範囲が広がった』、『1つの疾患だけでなくいくつかの疾患をつなげて考える力が身についた』など考え方の深まりや拡がりを感じた学生もいた。また、指導者からのフィードバックから、『患者の個別性を考慮した看護計画の実際がわかった』、『何を見てどう考えれば個別性のあるものになるか知ることができた』と感じた学生もいた。

臨地実習の受け持ち患者を中心に、継続して学内実習で実施した取り組みでは、「看護計画をシミュレーションすることからの気づき」があり、『教科書通りの手浴では患者に合わせたケアにならず考え直すことができた』、『見守るということも大切な看護と学んだ』、『本当に(計画)内容が目標の達成につながるのか、実施に向けて事前に収集すべき情報が検討できた』という学びがみられた。「看護技術のエビデンス検証から得た気づき」では、『誤嚥予防について姿勢や食事形態など詳しく知ることができた』といった知識の深まり、『検証データと文献をつなげ根拠を援助につなげることができた』、『1つの事象について問題を追及することで問題が明確化されることがわかった』と患者の問題解決過程を意識して関連づけている学生もいた。

「患者との遠隔コミュニケーションからの気づき」では、『患者さんと焦りすぎずに会話することができた』といった自己の振り返り、『どんな言葉だと傷つかないのか言葉遣いに気を付けて考えられた』、『どのように説明すれば納得してくれるか考えることができた』のような相手に合わせたコミュニケーションへの気づきもみられた。『精神面や社会面がわかった』と、患者と会話することで知ることができる内容を意識した学生もいた。

「チーム活動の中で得た学びや工夫」では、今までの自分の振り返りから、『カンファレンスで積極的な発言ができた』、『グループワークでためらわずに自分の意見を言えた』など、積極的な意見交換を意図的に実施できた自分を評価していた。チーム内での役割分担も、『重要な役割を避けてきたが積極的に役割を引き受けて行動できた』、『発言し易い環境をつくるために自分から話しかけるな

表4. 学生が感じた自己の成長と達成できたこと

	内容	リファレンス数(文)
1	問題解決思考のステップアップを実感	39
2	患者との遠隔コミュニケーションからの気づき	19
3	学習方法や姿勢の変化	19
4	対人関係技法の活用	13
5	患者を中心として考える姿勢	10
6	チーム活動の中で得た学びや工夫	8
7	多職種の間わりの実際からの気づき	5
8	看護計画をシミュレーションすることからの気づき	3
9	看護技術のエビデンス検証から得た気づき	9

ど打ち解ける努力をした』などメンバーの一員として効果的な学習ができるよう努力した学生も多かった。

多職種連携に関して、実習中に電子カルテ内で患者に関わる職種を把握し、指導者に看護との連携に関して質問する時間を設けた。学生は、『1人の患者の入院前から入院後までたくさんの職種が支援している』ことの実感や、『他職種の視点からもみることで患者の新しい一面を知った』という学びがみられた。

プログラムに限定されない学びや気づきとして、「対人関係技法の活用」、「患者を中心として考える姿勢」、「学習方法や姿勢の変化」をあげた学生も多かった。「対人関係技法の活用」では、他者とのコミュニケーションを課題と感じる学生も多く、『話を聞く中で自分の理解があっているか意識して実践した』など臨床心理士のワークショップで得た学びを、患者やチームメンバーとの会話で意識的に実践した学生も多かった。「患者を中心として考える姿勢」では、指導者や教員との関わりから、『患者さんのケアをより良いものにするため改善点を積極的に質問できた』と感じた学生や、『患者さんがどのような方なのか純粋に知りたいという気持ちをもって接することができた』、『患者を知るために患者の発言に疑問をもつと深まる』など、自然と関心に向けられる学生もいた。「学習方法や姿勢の変化」では、日々の実習を振り返り、自分が不足していた点・課題・自己の傾向などの気づきを翌日の実習につなげ、取り組むことができた点を評価している学生が多かった。『人に頼らず主体的に取り組むと自分のためにもなり楽しかった』、『自分で解決すると理解度が全然違った』というように、受け身の学習姿勢から意識的に行動を変化させた学生もいた。『疑問をもつ姿勢を大切にして納得するまで追求できた』、『不明点を放置せず確認するよう努力した』、『知識の調べ方の変化』と探求する姿勢を意識した学生もいた。

#### IV. 考察

新型コロナウイルス感染症の影響により、制限があるなかでの実習科目において、教育の質を担保するため、臨地以外の教育代替手段を含め、どのように全体をデザインするかが大学の課題となっている（文部科学省, 2021）。今回のプログラムのデザインで、効果的であったと考える点を3

点述べる。

1点目として、病院の電子カルテからの情報収集、指導者との関わり、遠隔コミュニケーションなど、少ない時間、部分的な参与であっても、臨床で経験する内容を取り入れた点である。事象の結果が整然とまとめられた事例と違い、現在進行中の電子カルテは、患者を取り巻く混沌とした莫大な情報であふれている。問題解決思考の習熟には、操作や学内演習の復習に留まるなど個人差がみられたが、日々、流れていく患者の情報や指導者の考えに触れることで、今何が大切かという優先順位を考えること、変化に応じた看護や今後を見据えた看護の必要性を意識できており、学生の学びに影響を与えたと考える。遠隔による患者との会話も、短時間で代表者が実施する形式であったが、学生は緊張し、焦り、関わりに悩む姿がみられ、実際の対面と変わらない反応だったと考える。遠隔であっても患者と関わることで、自然と患者へ関心をもつ学生や、より良い看護を考える姿勢がみられた学生もおり、短時間であっても患者の存在を実感できる機会になると考えた。臨床側の協力で、会話以外に病床環境や創部、下腿浮腫などを観察できた場合もあり、電子カルテで読むだけではイメージが難しい部分の補足ができたと考える。

2点目は、臨地で受け持ちとなった患者を中心に継続性をもって、シミュレーションやエビデンスの検証といった学内実習プログラムを展開した点である。実際に援助することが難しいなかでも、アセスメントした患者の状況を想定し実施することで、この方法で目標を達成できるのか、患者の疾患や年齢を考慮した方法なのかを検討し、実際に行ううえでの手続き的知識を学ぶことができたと考える。エビデンスの検証についても、学生は患者の具体的な状況から、多様な問いをたてることができたと考える。また、検証する過程を通して、看護計画の根拠を再考する機会にもなった。

3点目は、臨地や学内に関わらず、他学生と協働したチーム活動により、相互作用のなかで得る成長や学びが存在する点である。実習は学生にとって集中して難しい課題に取り組む機会であり、個人で取り組むことに限界がある場合もある。このような、必要性に迫られる環境のなかで、なかなか意見が言えない、重要な役割を避ける、積極的に行動できないなど、今までの自己の課題を踏ま

えつつ、効果的な共同作業ができるよう努力や工夫を重ねていた。太田ら（2021）が報告した、コロナ禍で学内実習となった学生アンケートでも、実習の良かった点として「協働」があがっており、皆で作りに上げる実習という意識や他学生の学修を知ることができた点があがっており、学内実習ならではの効果も検討していく必要性が示唆された。

課題として、遠隔による患者との会話を一部の学生しか経験できなかった点がある。学生数が100名前後となるなか、機器の確保やハウリング対策など技術的な問題も含め検討していく必要がある。ICT環境の改善は、他大学における代替実習でも指摘されており（太田ら, 2021; 左居ら, 2021）、コロナ禍では喫緊の課題と考えられた。

また、教育プログラムとして、臨地実習中に対人関係ワークショップの影響を強く意識はしていなかったが、予想以上に学生の反響は多く、積極的に患者との会話やカンファレンス、チーム活動で活用している学生も多かった。対人関係に自信がなく、成長や気づきとして挙げていた学生も多かったことから、学生の特定の課題に焦点をあて、専門家によるプログラムを活用することも、効果が期待できると考えた。今後は他のプログラムにおける活用も視野に入れ、内容やタイミングを吟味していく必要があると考えた。

## 文献

- 厚生労働省. (2021). 新型コロナウイルス感染症について 国内の発生状況. 2021.8.31閲覧  
[https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kokunaino\\_hasseijoukyou.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kokunaino_hasseijoukyou.html)
- 文部科学省. (2021). 新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告書 看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について. 2021. 8. 31 閲覧  
[https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt\\_igaku-000015851\\_0.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_igaku-000015851_0.pdf)
- 太田晴美, 大崎真, 早坂笑子. (2021). 新型コロナウイルス禍の学内総合看護実習評価—学内アンケート結果から—. 東北文化学園大学看護学科紀要, 10(1), 27-42.
- 佐居由美, 西野理英, 猪飼やす子, 小布施未桂, 縄秀志, 樋勝彩子, 鈴木彩加, 亀田典宏, 大谷優加子. (2021) コロナ禍における「学士看護展開論実習」:

病棟実習困難下にて、いかに臨床を伝えるか.  
聖路加国際大学紀要, 7, 148-153.

